



発行者：おじさんズ3号



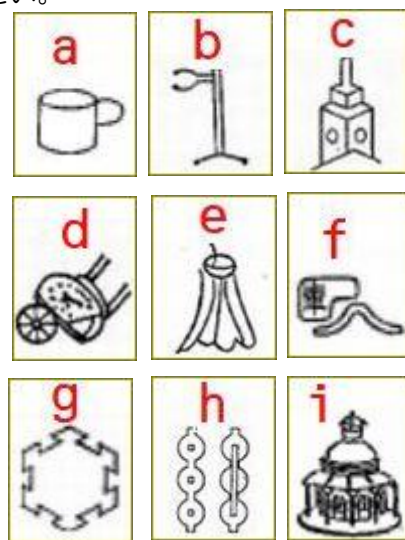
春の海
ひねもす
のたりのたりかな
与謝蕪村



これより幌別に行く。十四、五町ばかりに休所がある。ラフキ(蘭法華)の坂という。

ここよりはるか達山(駒ヶ岳)を望み、海面を見渡す。この坂をつづら折りにして山に沿ひ浜に沿ひてだんだん下る。坂下は平地で室蘭まで続く。下り口に小川があり、土橋が架けてある。

実にすばらしい眺めで、言いあらわす言葉ないほどである。中国唐の西湖八景か、わが国の近江八景もこれほどではないだろうという景色である。



というわけで、こちらも今夜はビールを味わった第一号殿に敬意を表し「麦酒で乾杯！」といきますか。



史筆作句歌柳話
自隨創作俳短川童
etc

「市井へ」とチャーチルが

〈志いつの間にやら裏金に〉とは、なんと、少人数とは言いがたい日本の政治家の醜態を即妙に言い当てた川柳ではありませんか。朝日新聞夕刊のコラムで見つけました。

かつて同紙の天声人語などを担当した福島申二氏は続けます。「我が世の春を満喫するうちにモラルが自壊してしまったような政権党がニュースにならない日はない。思い上がった選良意識や内輪の論理に漬かってきた政治家諸氏には、初心とは、すでに帰れぬ遠い故郷のようなのかも知れない」と。

そして映画「スミス都へ行く」を取り上げ「こうした映画を観ると、自らの初心や初志に誠実である勇気が、政治家の大切な生命線なのだろうと思われる」と示唆しています。

これと似た話かもしれませんが、最近観た映画「ウィンストン・チャーチル／ヒトラーから世界を救った



男」の名場面を思い出しました。

第二次大戦下、猛進撃するドイツ軍に対して英国の新首相

チャーチルは徹底抗戦か、和平交渉か、思い悩みます。彼はある日、議会に向かう車の中で国王の言葉を思い出します。「(迷ったら)国民の声を聴け」

車から忽然と姿を消したチャーチルは初めて地下鉄という電車に乗り＝写真＝、畏怖する乗客たちに戦うべきか、否かを問い、そして決断します。

市政の人々の声―政治家の初志はこの上に成り立ち、その後の針路がぶれないための羅針盤でもあることを語っていました。

「キミ」と呼ばないで

年に数回、札幌からやって来る孫の6歳の男の子に、多少大人の会話めいた雰囲気と敬意らしき意味合いを込めて「キミは」と声をかけると、へそを曲げられてしまいました。そして母親のそばで訴えました。

「おじいちゃんにキミと呼ばれた。いやだ。ちゃんと名前を呼んでほしい」

ズンとききましたね。そうか、大人の勝手な解釈、都合だったか。悪意ある呼称と受け取ったか―と反省しきりです。

広辞苑を開くまでもありません。「キミとボク」が登場する「おさななじみ」という歌を思い出し、悟りました。孫との歳の差は永遠に縮まらないことを。

青いパイアの叫び



75歳のものぐさ考

「ものぐさ」なる言葉について辞書を開きました。もの-ぐさ【懶・物臭】①無精なこと。その性質の人②懶草履(短くて、かかとのない普通の半分の草履)の略。

なぜ調べたかということ、朝食⇒薬を飲む⇒歯磨き⇒ガムをかむ⇒目薬、という朝のルーティンに「ヒゲ剃り」を入れるか、否か、時々迷うからです。

会社勤めの日ほぼ毎朝剃っていましたが、今は仕事に出るわけでもなし、「終わった人」には外面を気にする心も消え失せ、どっちでもいいじゃないか―との声も聞こえてきます。

伸ばすだけ伸ばして、きれいに手入れするか、外出する日だけ剃るべきか、半分だけの草鞋を頭に浮かべ無精ヒゲをなでながら今朝も思案しております。

薫風 烈風

▶「あんだでしょう、熱海のことをネッカイ、小豆島をアズキジマと言ったのは」―某落語家のはなしの枕ですが、「市井」をイチイと呼んでも結構なんですよ。意味さえ通じれば。本当に漢字の読みは難しい。「奥義」を「**オウギ**」と発音するのに、「奥伝」はなぜ「**オクデン**」と読むのか、未だに分かりません。どなたか、教えてください。

▶本通信も40号に到達しましたが、まあ、あと残り10カ月、50号のゴールを目指して淡々と粛々と歩を進めるだけです。

今月号も、題材をあれこれ考えているうちに発行日が迫り、2日半でのやっつけ仕事と相成りました。外に出る機会が減ってきた分、ネタ枯れの荒野をさま迷っておりますが、何とかなるさの精神でいきましょう。

▶啓蟄も過ぎました。穴から這い出した虫の気持ちで、春のチョイ旅もよし。ウクライナの国民的詩人タラス・シェンコフの「画学生」を翻訳した、あの方の人となりを訪ねて日高方面へ。一泊二日の節約旅を計画するのも楽しみ。皆さん、お元気で〜。